

先人の志を 受け継ぎつつ 変革に挑戦を

私どもダイハツ工業は、おかげさまで本年3月には創立100周年を迎えることになりました。これもひとえに世界中のお客さまとご支援いただいた方々のおかげと心から感謝いたしております。

もちろん企業にとって100周年とは大きな節目ですが、単に祝うのではなく、次の100年に向けて新たな一歩を踏み出すことが重要だと考えています。そのためにも、創立当時の先人の志を知ることにより、あらためてダイハツの使命を社員一同が共有化していくことが必要です。

振り返れば、産業立国に貢献する発動機の国産化をめざして、当時の大阪工業高等学校(現：大阪大学工学部)と大阪の実業家の有志が、ダイハツ工業の前身である「発動機製造」を創設したのは1907年のことでした。官営でも財閥系でもない関西生まれの産学共同の先駆けともいえるべきユニークな企業としてスタートを切りました。

当時の日本は、常時10人以上の従業員規模を持つ工場は全国で1万未満、そのうち動力源に原動機を使用しているのは半数もなく、ほとんどが輸入品という時代でした。

創業の呼びかけにこたえて参加した技術者たちは、安定した地位を捨て、海のものとも山のものともつかない、ゼロスタートの事業に情熱を傾けたということです。試行錯誤を繰り返しながら、国産発動機の開発・生産に燃えた先達の、真剣なものづくりの姿勢がダイハツの原点だと思います。

1930年代以降、弊社は自動車に進出し、ミゼットに代表される三輪車から今日の軽自動車をはじめとするスモールカーに至るまでの歩みの中で、ものづくりへのこだわりは着実に受け継がれてきたのではないかと感じています。



箕浦 輝幸 氏

Teruyuki Minoura
ダイハツ工業社長

日本企業の強さを支えている要素は多々ありますが、なかでも日本特有の「企業も従業員も会社生活を通じて成長していく」という考え方が、強い現場、優れた従業員を育ててきたのではないかと思います。日本語の単語がそのまま世界で通じる言葉となりつつあるものに「カイゼン」「現地現物」があげられますが、これこそ日本のものづくりの強さの証明といえるのではないのでしょうか。

ダイハツも「人を育て、大切にする」職場づくりをめざしてまいりました。ただ、将来に向けて企業が社会の要請、お客さまのご要望におこたえしていくためには、これまでのDNAに加えて環境変化に対応した新たなDNAを従業員が共有し、後輩に伝えていくことが極めて重要だと考えております。

ダイハツの100年は日本国内での事業を中心とした歩みでした。しかし、次の100年を考えた時、グローバル企業への変革が必須です。日本の市場は人口減少時代を迎えようとしています。世界に眼を向ければ、私どもの担当するスモールカーを必要とされるお客さまは年々増加しております。

関西育ちの日本企業としてのアイデンティティーを保ちつつ、真のグローバル企業へと改革していく。言葉は簡単ですが、実現は並大抵ではないことを痛感しています。ブレークスルーによって改革を断行する。これこそが先人の労苦に対してこたえる後輩の務めだと信じています。

談